

庄内協同ファームだより

No.133 2011年1月号



発行/
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140
http://www.shonaifarm.com



庄内協同ファーム青年部主催で、事務所周辺の環境整備した後の集合写真です。
(青年部主催の美化運動の一環)

新年あけましておめでとうございます。

庄内平野は、薄く降り積もった雪の田んぼに白鳥が舞い降り、こぼれた落穂を懸命に探しついでにばらばらといる風景が、あちらこちらで見られます。人影のない冬の圃場にも生命の営みの力強さを感じます。

2010年は、本当に天候不順でした。春先の降雨や低温、日照不足は育苗時期の稲や野菜に影響があり、農作業のスタートから緊張の連続でした。

田植後も低温により活着の遅れと庄内特有の最上川上流から平野に吹き込んでくるダシの風(内陸部から東風)で、紙マルチ田植機で植えた圃場の紙がはがされ、吹き飛ばされました。やむなく紙を取り除き補植したものの、長く続けた有機栽培を植え付け直後泣く泣く断念した組合員もいました。

夏には激烈な猛暑。稲作にとって水不足の年に不作はなといわれてきましたが、記録的な暑さでただちや豆(枝豆)は虫の食害で手選別には苦労しました。収穫量はあるにも

かわらず、サヤの傷で正品の出荷量は激減し、収穫期も早々と8月下旬で終了という事になりました。

秋野菜(大根)の播きつけも猛暑で遅れ気味の作業直後に、ゲリラ的集中豪雨で畝うねが流され、くずれ、播きなおしたものの生育不良となり、収量は望むべくもない結果となりました。少しは期待した秋の収穫も思いのほか多くなく、特にササニシキにいたっては等米比率はかなり低く、これまでになく品質が良くない状況でした。

しかし、今年初めて作付けをした山形県奨励品種のつや姫は、有機栽培の中でも特に品質も良く、組合員すべてが1等米という結果で、私の場合10a 500kg近い収穫でした。今年の異常気象のもと、ことさら収穫のうれしさと天の恵みを感じています。

収穫後は低米価、低品質に悩む農家に突然のTPP騒動。農村のくらしの足許をすくう様な自由化の波が二気に押し寄せてきました。村では大揺れの中、多難な新しい年を過しそうです。

しかし、庄内協同ファームではこれまで培ってきた農産物や農産加工品を通して、「まち」と「むら」を結ぶ交流、産直を大切に、食や環境そして農業や社会をお互いが考えていければと思っています。問い問われながら農業を続け、「安心で安全なもの」、「あたりまえのもの」をありのままに生産したものを食べる人達に届ける事が出来ればと思っています。

庄内協同ファームでは、若い後継者も確実に育っています。政策や農業経営に少し不安も抱きながらも、有機栽培に挑み、天候不順や栽培技術に悩みながらも、未来を思い描き、励んでいます。頼もしく思っています。

新しい年も、空の下で、村の中で、暮らしを見据え農産物を作りたいと思います。庄内協同ファームを通じて、食べる方々に私達の農産物を届け、想いも届けたいと思っています。皆様の二層の支援を心よりお願い申し上げます。

代表理事 五十嵐良一

水稲新品種「つや姫」



山形県期待の水稲新品種「つや姫」が昨秋デビューしました。昨夏記録的な猛暑で全国的に米の等級、品質の下がったなか、一等米比率98%と非常に高く、また食味も良いと各方面より高い評価を得、幸先の良いスタートを切りました。

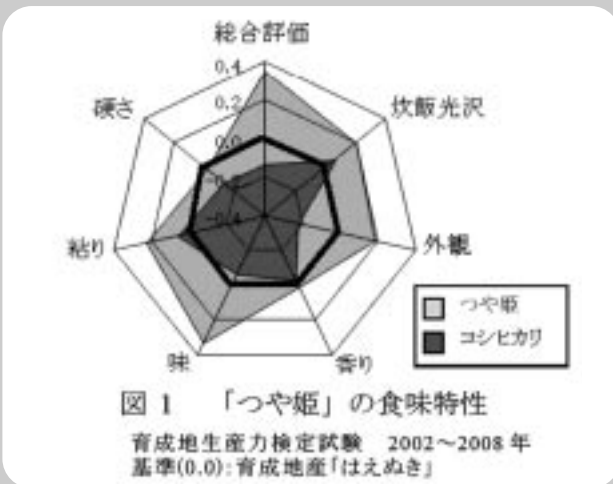
「つや姫」は平成10年鶴岡市にある山形県農業総合研究センター水田農業試験場でコシヒカリ系統を引き継ぐ山形70号と東北164号の交配でできた品種で、選抜育種を繰り返して平成17年に完成（地方番号山形97号）その後奨励品種決定調査等を行い、平成20年度山形県の奨励品種に採用され、名前は公募の中から「つや姫」と決定されました。

品種の特性は、粒がコシヒカリ同様大きく、玄米は光沢があり白未熟粒が少なく、また炊飯米は光沢・外観・味が優れ、良食味。さらに栽培する私たちにとっても、草丈がコシヒカリより低いいため倒伏に強く、

葉イモチ病抵抗性も強い品種でどちらかというと栽培しやすい品種です。

県は「つや姫」のブランド化を目指し平成22、23年は栽培面積・生産者を限定、栽培方法も有機栽培、特別栽培のみ、また食味値が一定基準に達しないと「つや姫」として出荷できないなどの制限を設けての取り組み。庄内協同ファームでは22年12名で1、160[㍓]の取り組み、23年14名で1、740[㍓]計画をしています。

長年有機米を栽培してきた私たちは経験を生かしくいしく品質の高い米の生産に励み、この品種を一流ブランドにする事を目指したいと考えています。



2010年度の 稲作状況について

庄内協同ファーム 米部会生産者 阿部 正雄

昨年2010年の稲作は、気候の変動が大きく、厳しい一年となりました。四月から五月にかけては、低温の日や雨の日が多く、苗の生育が遅れたり、田んぼでの作業が遅れたり、やっと田植えが終わったと思えば又低温が入り植えた苗の生育が遅れたり、天候に悩ましながらのスタートとなりました。

六月に入り、天候の回復とともに稲の生育もある程度は回復してきたものの、夏には、記録的な猛暑となり、高温障害による品質の低下が心配され、稲刈りの直前にはゲリラ豪雨があたりと、稲作にとっては厳しい環境の一年でした。病害虫の被害も心配されましたが、カメムシの被害が少し多く見られましたが、いもち病などの被害はほとんど見られ

ませんでした。しかし、収量は昨年に比べ、10a当り約40kgの減収、品質も一等米比率77%と低いものになってしまいました。

異常気象が当たり前ようになってきた近年、激しい気候変動に対処していくのは大変ですが、これからも安全でおいしい米作りに頑張っていきたいと思っています。



9月10日 圃場巡回にて

組合員 訪問

その22

佐藤和則さん

高三の時に父親と死別。得意のス
ポーツで自分を生かす進路を諦め、
家業を継ぐことを決意する。以来、

農産物を作るおもしろさ、 安心安全への強い思い。

一度も農業を嫌だと思ったことがな
いという佐藤さんは、上背もありフ
アームの巨漢、大きな目と口ひげ
が印象深い。

父の遺産

苦しくも就農と同時に、父親の買
い求めた田地の償還が始まった。立
地条件の悪い所が多く、その上農地
もその頃は高かった。十八才から三
十三才までの十五年間、返済を続け
ようやく終わった。

有機栽培へのこだわり

現在、耕作面積のすべてを有機・
無無栽培で作っている。地元の農業

研究会に入り、産直を経験したこと
を土台に、農産物を作るおもしろさ、
安心安全への思いを強くする。以来、
田んぼにも畑にも除草剤は使用せず、
二十年の歳月が経つ。その間、働き
手は自分一人だけ。周りを見ても新
卒就農者が極端に少ない年代だった。

時代の狭間に生まれた後継者

“農家の長男に生まれ
たから農業を継ぐ”と
いうそれまでの固定観
念から親も子も抜け出
し始めた時代。工業化
の波が農村にも押し寄

せ、家は継ぐが家業は
取り敢えず両親が続け、
結論はおいおい出せば
良いという風潮が強か
った。先延ばしされた
結論がどう出るのか、それが心配。

ファームでの自分の役割

何と言っても、新商品のメディア
デビューを果たすこと。今、自分の
中にあるアイディアを何とか形にし
てデビューさせることが目標であり、
自分の役割と言い切る。ファーム第
一世代とその後継者とのちょうどま
ん中に位置する中堅世代。出そうで

出ない新商品。一番むずかしいとも
思える商品開発で、ファームを活性
化させたいと強く願っている。自分
達なりのものを何かつかんで花を咲
かせたい。

隠れ日本一、いのちの言

栽培している米の品種の中に、い
のちの言という品種がある。庄内町



友人と一緒にの佐藤和則さん(右)

では“あなたが
選ぶ日本一おい
しい米コンテス
ト”というイベ
ントがあり、そ
の上位三つに今
年はすべて、い
のちの言”が選
ばれた。食味計
に頼らず、炊き
たてを舌で味わ
つておいしさを
決める所の特徴
がある。評判の
高いもの、価値
のありそうなも
のに敏感に反応

し、行動を起こすこと。幅広い情報
網を使って、今をキャッチすること、
農作業の合間にも東奔西走に暇がない。

これから

牛ふん尿を発酵させて液肥を作り、
米づくりに生かしたい。自分は農業
高校を卒業した訳ではないので、米
づくりを基礎から学んだ経験がない。
親のしてきたこと、田んぼの仲間達



から多くを学び、今に至っている。
その分、技術やデータの公開への希
求は強い。自分も学びたいが後進の
役に立てればと考える。秋田・新潟・
山形の三県での技術交流実現への足
がかりもあり、技術向上への夢は膨
らむ。

プロフィール

佐藤和則(四三) 庄内町余目字上朝丸

家族 祖母、母の三人暮らし

経営規模

米 五二〇㍏

うちJAS有機 四一〇㍏ 無無栽培 一一〇㍏

他に黒豆、枝豆、青豆を栽培

趣味

お酒を楽しむこと。一人でゆっくり酒のつま
みを自分で作って楽しむ。テレビを観ながら
ポーツとしてゆったりとすぎる時間を楽しむ。

ペンリレ 徒然草

庄内協同ファーム 青年部
工藤 祐生

「2010年度 青年農業者交流会」 参加レポート



11月17日(土) 18日にかけて首都圏にて開かれた青年農業者交流会に参加してまいり

ました。自分がこの交流会に参加するのは一年ぶりです。一回目でした。初日はまず「環境保全型農業と流通について」と言った講演で取引先の理念・流通に関する概略と、そして、T P Pの事を踏まえ、外国産が入ってくればくるほど消費者も巻き込み皆でリスクを負担する機能が必要になる事。その為には違いが見えるように違いを消費者に理解してもらうように生産者が自信を持って自分の言葉で主張する事が大事で、自分の生き方、拘りに主張を持つ事の重要性を学びました。その後は自分も9月に参加した「生産者研修」の報告が行われました。自分自身は壇上に上がった報告は行わなかったのですが、他の産地の人の発表を聞くと他の人も同じような感想で苦労したんだなあと思いました。講演・報告会が終了後は新横浜へ移動して、「二日目にお世話になつた取引先の職員の方々と懇親会が開かれました。この席では職員・他の産地の方とも情報交換が出来て、大変盛り上がったので、懇親会終了後は取引先の本部が近くにあり

た事もあり、予定には無かつた本部見学と「トルセンター」見学をさせて頂きました。二日目は各センターに分かれての組合員・職員との交流会とセンターの施設見学を行いました。センター施設見学については7月前に「生産者研修」にて視察研修させて頂いていましたので、特に特筆すべき点はありませんでした。

組合員・職員との交流会では生産者の産地紹介の時間を頂いたので、口下手ながらも庄内協同ファームのことを目一杯宣伝して頂きましたが、他の産地の所ではあらかじめスライドショーや動画、農産物や商品を用意して紹介しているところもあり、パンフレットだけでは紹介は相対的に紹介負けした感じが否めませんでした。こういった現場のスライドショーや動画を庄内協同ファームの青年部で作って、こういった機会に持ち込む事も考えた方が良いのではないかと思います。ただ、豆についてはほとんどの方が知っており、反応もあつたのですが、山形県内では知らない人はいない期待の新米「つや姫」の事を話したところ、反応も薄く、名前自体知らない人が大勢で、まだまだ首都圏の方では知名度が全く無いようでした。実際の交流会は各テーブルにて食事を交えての交流でしたが、やはりこういった会に参加する組合員さんは農業問題の意識も高く、丁度T P Pが巷で話題になっていたこともあり、その話

題で盛り上がりました。それに関する議論でいろいろ熱くなつてしまふ食料主権に関する問題についてエカアドルの例を取っての持論と、国々の農業戦略に関する考え方を農業補助金の方向から米・英・仏の諸外国と比べて日本はどうなのかの持論を展開してしまいました。かなりレベルの高い意見交換が出来たのではないかと考えております。しかしながら、G A Pの事について聞かれた時は名前と概要ぐらいしか知らず、自分の勉強不足でほとんど何も答えなれなかつたので次からはこのような事がないようにしたいと思います。

新春のつぶやき

銀シャリ太郎

明けましておめでとございます。今年
はうさぎ年、大ジャンプの年にするぞ!!

今、予約すら出来ない大ヒット商品「GOPAN」を手に入れました。ネットで高値で取引されていますが、私は電気屋さんで買いました。予約して2カ月かかりました。皆様知っての通り、お米からパンが出来るすぐれものです。朝食べるとなると夜のうち仕込んでおく必要があります。そうすると米を砕く「ミル」の音がガーッとするため日中では気にならないのですが、夜はチョット気になります。それ以外はすごい商品ができたものだと感じます。米独特のモチモチ感は私の好みに合うものです。今、朝食はパンになっていますが、私の中のパンのイメージはあくまでもお菓子の一部で、気持ち的に少し足りないので、普通のご飯も少し食べます。これで少しでも米の消費量が増えれば助かるなあと思っています。そして不思議な事にパンにすればどんな米でも同じだろうと思っていたのですが、おいしい米で作ったほうがパンになってからでもおいしいのです。ファームのお米はおいしいので是非試してみてください。

去年の猛暑の中、心配していたのですが期待の新品種「つや姫」が本格デビューしました。品質、食味とも大変好評で品薄状態ではありますが、見つけた人は是非御賞味ください。今年も良い年であります様に。

あとがき

確固たる目標や、はっきりとした希望が描けないまでも「新年」というと、やはりこれからが始まりという清新な気持ちに包まれて背筋が伸びるような気がする。

還暦を間近に控え、現役もいよいよ終盤戦、そろそろ縮小に向かうかと期待を抱けば、さらに佳境の感。

長年の経験で培ってきた技術を実践を以て形にしたいという思いは加齢と共に小さくはならず、なおも羽ばたきを続けている。米どころ庄内平野の中にいて、こんな意欲がそがれることのない世の中を、年頭に願う。

昨年の米一俵60kgあたりの仮渡金は八千円。生産費すら賄えないこの価格では離農する人が後を絶たない。やめていく人が増える一方で、一戸当りの耕作面積が膨らみ、放任栽培的な田んぼが今ですらあちこちに見受けられる。耕す人を無くした大地が荒野に戻るのに五年とかからない。

美しく広がる田園風景を荒らしていくのは離農を決めた農民か、価格競争に翻弄され、適正価格を見失った世の人々か。米の値段に限らず物の値段というものと真剣に向き合わなければ、崩れ落ちていくかけがえないものを、とどめておくことはできない。

(東)

